キャラクター名: フリッツ・フォン・シュタイン

プレイヤー名:

メインクラス	ウォーリア	**Lv.1:**		**レベル**	4
サポートクラス	モンク	**Lv.1:**	モンク	**性別**	男
称号クラス				**年齢**	32
種族	ドゥアン			**境遇**	紛失
出自（効果）	騎士			**目標**	扶養

	筋力	**器用**	**敏捷**	**知力**	**感知**	**精神**	**幸運**
基本値	19	14	9	6	7	15	7
ボーナス	6	4	3	2	2	5	2
クラス修正	2	1	2	0	0	1	0
他修正						2	
能力値	8	5	5	2	2	8	2

HP	70
MP	48
フェイト	5

装備品		**射程**	**命中**	**攻撃**	**回避**	**物防**	**魔防**	**行動**	**移動**
右手	ロングソード	至近	-1	7	0	0	0	-1	0
左手	ハイクオリティシールド		0	0	0	5	0	-1	0
頭部	ヘルム				-1	2			
胴部	シルバーチェイン				-1	8			-1
補助	ファインポイントアーマー				-1	5			
装身具									
能力値			5	0	5	0	8	7	13
スキル	ハードマッスル/レジストエレメンタル					6	9		
その他									
総計(右)			4	7					
総計(左)			5	0	2	26	17	5	12
総計(両)									m
ダイス数			3 d	2 d	2 d				

	能力値	スキル	その他	合計	ダイス数
トラップ探知	2			2	+ 2 d
トラップ解除	5			5	+ 2 d
危険感知	2			2	+ 2 d
エネミー識別	2			2	+ 2 d
アイテム鑑定	2			2	+ 2 d
魔術判定					+ d
呪歌判定					+ d
錬金術判定					+ d

所持品	
冒険者セット	
ポーション	
バックパック	
毒消し	

現在重量： 9

最大重量： 43

所持金： 105

預金・借金： 2500

スキル名	**SL**	**コスト**	**タイミング**	**射程**	**対象**	**判定**	**制限**	**メモ**
タフネス	★	-	パッシヴ	-	自身	-		
効果：	有角族、作成時に最大HP+5							
アームズマスタリー：長剣	★	-	パッシヴ	-	自身	-		
効果：	命中+1D							
カバーリング	★	2	DR直前	至近	単体	自動成功	1/ﾒｲﾝﾌﾟﾛｾｽ	
効果：	対象にカバーを行なう							
アイアンクラッド	4	3	DR直後	-	自身	自動成功		
効果：	物理ダメージ-［SL×3］							
ハードマッスル	2	-	パッシヴ	-	自身	-		
効果：	【物理防御力】に+［SL×3］							
マインドアプデト	★	-	パッシヴ	-	自身	-		
効果：	【精神】+2							
レジストエレメンタル	3	-	パッシブ	-	自身	-		
効果：	【魔法防御力】に+［SL×3］							
コールアウト	1	4	ｾｯﾄｱｯﾌﾟﾌﾟﾛｾｽ	10m	単体	精神		
効果：	対象と【精神】対決し勝利した場合、対象に［逆上］を与える。対決の判定に+［SL×2］							
ボルテクスアタック	★	-	効果参照	-	単体※	自動成功	1/シナリオ	
効果：	武器攻撃と同時に使用する。その武器攻撃を「対象：単体※」に変更し、ダメージに+[CL×10]する							
ファーマシー	2	-	アイテム	-	自身	-		
効果：	HPポーションを3個取得							
エンラージリミット	1	-	パッシブ	-	自身	-		
効果：	所持重量制限が【筋力基本値】×2							
トレーニング：精神	1	-	パッシブ	-	自身	-		
効果：	【精神基本値】+3							
トレーニング：筋力	1	-	パッシブ	-	自身	-		
効果：	【筋力基本値】+3							
効果：								
効果：								

彼の両親はキルディア共和国、北にある村に住み、彼を身ごもった。
ある日、その村は妖魔に襲われてしまい、父は殺され、母は身ごもったまま妖魔に操られた。操られた状態で彼は生まれてきたため、幾分か妖魔の血が流れている。
（妖魔の血が流れているため、他のドゥアンと比べて身長がかなり低い）
その後、討伐隊によって妖魔は追い払われるが、戦いの中で母親も死んでしまう。

孤独になってしまった彼はそのまま討伐隊と共に成長していく。

成人した彼は、彼と同じ境遇の戦争孤児たちを救うため、孤児院を開いていた。
しかし、孤児院の経営には金がかかる。
そのため、孤児院を副長に任せ、彼は一人お金を稼ぐために紫水晶の塔へと旅立つのであった。